様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ１２６０６

研究課題名（和文）カーボ・ヴェルデにおけるアフロ・クレオールの即興演奏と身体行為の人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological research on musical improvisation and the embodiment of Afro-Creoles in Cabo Verde

研究代表者
青木　敬（AOKI, Kei）

関西大学・文学部・助教

研究者番号：６０７９１２１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、環大西洋奴隷貿易以来、白人と黒人の混血であるアフロ・クレオールの文化的営みによって発展してきたカーボヴェルデ共和国の伝統音楽モルナに表現される身体行為の役割と、アフロ・クレオール社会の文化的遺産の今日的価値を明らかにすることであった。
　現地で実施した聞き取り調査により、歌謡モルナを通じて表現されると考えられてきた郷愁の念ソダーデが、伝統音楽モルナを通して表象されるだけでなく、日常生活の多くの場面で島民が実践している重要な概念であることを明らかにした。また、ひとつの成果として、ソダーデの日常実践を描いた映画を現在もなお、制作中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究で明らかにした郷愁の念ソダーデの日常実践はカーボヴェルデ人にとって極めて重要な考え方である。第一に、国内人口のおよそ二倍の人口が国外移住していることから「移動」がカーボヴェルデ人を理解するための鍵概念であり、移動することによって彼らはソダーデを表現するため。第二に、国外へ離散していった「カーボヴェルデ人」および国内の島々を往来する島民の生き方や共生していくひとつの方法として、ソダーデの想いを共有することがあるため。
　これらの理由から、カーボヴェルデ人が国内外で新たな故郷を創造していくためにも、共有されるモルナという文化とそこから表現される郷愁の念ソダーデの理解が極めて重要である。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study is to clarify the role of embodiment expressed in the traditional music of Morna in the Republic of Cabo Verde, which has developed through the cultural activities of Afro-Creoles, and to value Morna as an intangible cultural heritage.
　I have conducted interviews in Cabo Verde in order to reveal a sense of nostalgia, sodade, that has been expressed through the musicians of Morna. However, I have understood that sodade is not only represented through the traditional music of Morna, but also as an important concept that is practiced by the islanders in many aspects of their daily lives. As a result, I am currently making a film depicting the daily practice of sodade to show the importance of Morna as an intangible cultural heritage.

研究分野：文化人類学

キーワード：故郷　クレオール性　無形文化遺産モルナ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）大西洋世界におけるアフロ・クレオールのアイデンティティ問題

近年、文化人類学の領域では、大西洋世界におけるアフロ・クレオールの人びとのアイデンティティ問題について議論されている（今福 2017）。半世紀前まで、クレオールは白人と黒人の間に生まれた混血を指し、否定的な意味を含む用語であった。そのため、黒人の起源がネガティブなものであると考えられる傾向があったが、近年、クレオールは彼ら自身のアイデンティティを指すようになり、肯定的に用いられるようになった (Bernabé *et al*., 1989)。このような潮流の中、「黒い大西洋」という概念が生まれ、「起源」だけでなく、大西洋世界における黒人の「経路」に光をあてることが重要であることが指摘された (Gilroy, 1993)。「経路」とは、離散した黒人同士の共有空間を大西洋世界に求めることであり、離散したアフリカ系の人びとはその共有空間のなかで支配者に抵抗する文化を発展してきた。

しかし、これまでのクレオールに関する人類学的研究は、米国、英国、カリブ海地域における「大西洋」を中心に論じられることが多く、アフリカ側の状況に関してはほとんどわかっていない。そのため、英語圏・フランス語圏とは異なる歴史を歩んできたポルトガル語圏アフリカの側からみた大西洋世界に目を向けることが不可欠である。

（２）カーボヴェルデの伝統音楽モルナ研究の問題

そこで本研究は、黒人奴隷貿易の中継地として重要な役割を果たした、西アフリカ島嶼部カーボヴェルデ共和国（以下 CV）の音楽を通じ、アフリカ側からの「経路」を提示する。

CV は９つの群島が集まった小国であり（図１）、南北でアフロ・クレオールの人びとの伝統音楽の種類が大きく異なる。このように地域によって存在する固有の音楽とは逆に、唯一、CV 全島において継承されてきた伝統文化に、歌謡モルナと呼ばれる音楽がある。支配者に抵抗するための文化であったモルナは、故郷から突き離された黒人が郷愁の念を歌ったことで形成され、これが全島へ共有・伝播したひとつの理由である。

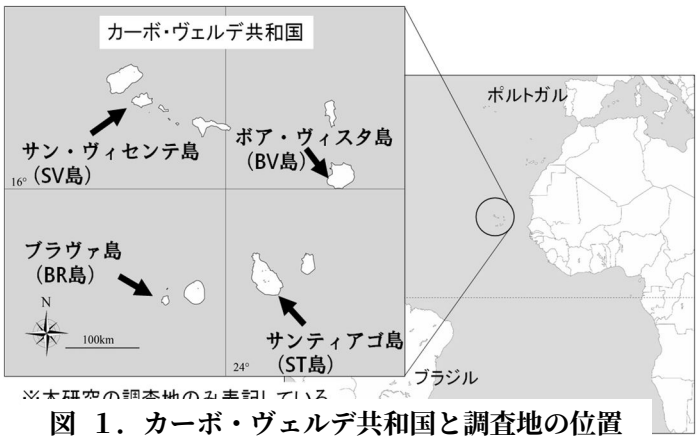

図　１．カーボ・ヴェルデ共和国と調査地の位置

これまでの歌謡モルナ研究は、歌詞の意味を紐解いた Rodrigues and Lobo (1996)、音楽を実践した Dias (2010)の民族誌的研究が代表的である。これらの研究はモルナ研究を発展させてきたが、歌詞の説明やパフォーマンスの記述に重点が置かれており、大西洋世界におけるアフリカ系人の共有空間としての「経路」のなかにモルナを位置づける視点がなく、モルナを通じてクレオールの現象を理解するための道が遮断されている。

また、現在のモルナ研究の指針は、2014 年に CV 政府によって開設されたモルナ研究センターが目的としているように、教育の場におけるモルナの実践的活用の方法であり、そのため同セ

ンターは、歌詞の保存、音声、映像資料の整理の必要性を唱えている(ASemana, 2014)。それにも関わらず、モルナに関する基礎研究（歌詞分析、旋律分析、民族誌的分析等）が未だに少ないのが現状である。これらの背景から、本研究は、大西洋世界の新しい「経路」の道筋を示すとともに、モルナに関する学術基礎研究として貢献できるものである。

以上、①と②の学術的背景を結び合わせることで、次の問いを導き出すことができる。CV におけるアフロ・クレオール文化としての歌謡モルナが、どのように新しい「経路」（黒人の郷愁→支配者への文化的抵抗）として大西洋世界の中に位置づけられるか。これに答えるためには、アフロ・クレオールが発展してきたモルナの身体表現への着眼点が鍵となる。

２．研究の目的

本研究は、環大西洋奴隷貿易以来、白人と黒人の混血であるアフロ・クレオールの人びとが発展してきた音楽に表現される身体行為の役割と、アフロ・クレオール社会の文化的遺産の今日的価値を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

本研究は、モルナの形成過程と変容において重要である CV 北部ボア・ヴィスタ島（以下 BV 島）とサン・ヴィセンテ島（以下 SV 島）、南部サンティアゴ島（以下 ST 島）とブラヴァ島（以下 BR 島）において、以下の①と②を行う。

調査計画は、平成 30 年度：SV 島と BV 島、平成 31 年度：ST 島と BR 島、平成 32 年度は、国際会議で研究発表し、モルナ研究センターを通じて研究論文を現地住民に公表する。

（１）映像分析と被写体の身体行為に関するインタビュー調査

モルナは野外、家屋、酒場、ホテルで演奏される。調査地４島におけるこれらの場所で、演奏の一部始終を撮影し、以下の（A）映像分析、（B）インタビュー調査を行う。

（A）　演奏中に歌われるモルナの歌詞の一文節を１シーンとして区切り、シーンごとにみられる下記の指標を詳細に描写・記述する。

- 即興で声を伸ばしたり縮めたりして想いを込める歌唱法メリスマの表現
- そのほかの身体動作（演奏者と歌い手の目線、リズムを刻む足や身体の振り方等）
- 音楽家と聴衆の反応（拍手、笑顔・涙等の表情、踊りだす等）
- 間接的な要因となりうるもの（風、天候、日中・夜中、服装、演奏場の装飾等）

（B）　被写体１０人と対話し、過去の人生経験から想起されるソダーデの記憶と感情についての語りを文字に書き起こす。また、これらの語りについて被写体と討論を深め、妥当性の高いデータに仕上げる。

（A）を「＜いま・ここ＞のソダーデ」、（B）を「＜あのとき・あそこ＞のソダーデ」として位置づける。個人の人生経験を通して感じる＜あのとき・あそこ＞は、音楽、身ぶりという手段を用いることによって、＜いま・ここ＞に現出される。これらの（A）と（B）における時空間の交錯を意識することによって、音楽に表れる身体表現の意味を解明する。

（２）データベースの作成（各島の伝統的なモルナの映像、歌詞、語り）

音楽を通じた身体行為と＜いま・ここ＞、＜あのとき・あそこ＞におけるソダーデの関係性を解明するために、１）＜いま･ここ＞に表現される身体行為を映し出す即興性を持つ演奏の映像、２）書面に書かれた歌詞（各島２０曲）、３）被写体の＜あのとき・あそこ＞で起こった過去の人生経験の記憶と感情についての語りを、以下の方法でデータベース化する。

- 各島に根づく伝統的なモルナの演奏を各島２０曲程度（計８０曲）撮影する
- 書店、図書館、テレビ局、ラジオ局で歌詞収集を行う
- 被写体の人生背景とソダーデに関する語り、その語りについての討論の文字化

このデータベースに基づき、調査地４島で得られた（A）と（B）のデータを比較考察することで、各島における身体行為が表すソダーデの意味と役割を解明できる。

４．研究成果

平成30年度は現地調査を2度実施した。1回目の調査はサンヴィセンテ島で実施し、1960年代に、遠洋漁業に従事していた日本人漁師とサンヴィセンテ島民が「共生」したことによって作られた歌 “Sayko Dayo” に関するインタビュー調査を行った。また、これに関する民族誌映画を制作するために、必要な映像を一部撮影することができた。これにより、カーボヴェルデ音楽の極めて重要な歴史ドキュメントを現地住民と共有することを可能とした。

2回目の調査は、モルナの形成過程と変容において重要であるカーボヴェルデ南部に位置するサンティアゴ島、ブラヴァ島、フォゴ島を対象にフィールドワークを実施した。ブラヴァ島およびフォゴ島は文化活動が少なく、モルナの演奏を確認することは少なかった。しかし、カーボヴェルデ北部でみられるような観光客のために演奏される新しい形式や意味をもつモルナではなく、20世紀に演奏されていた「伝統的な」モルナを映像で記録することができた。これらの「伝統的な」モルナには、ソダーデの情感が表現されていた。サンティアゴ島に関しては、観光客に向けて歌われるモルナが演奏されており、観光客を対象としたモルナは即興性とは対照的な「準備されたパフォーマンス」が際立った。

令和元年は前年度同様、“Sayko Dayo” に関する調査を実施し、不足していたデータや記録を収集した。これによって、新たな問題提起が浮上した。すなわち、“Sayko Dayo” がつくられた背景には、現地の音楽家や日本人漁師および島民との共生という背景があっただけでなく、現地の売春婦や「ポンビキ」と呼ばれる少年たちの存在が極めて大きいことがわかった。「共生」と言いつつも、実は “Sayko Dayo” がつくられる際には、外国人との「交流」（暴力、性交渉等）が必ず伴っており、この場合は日本人が大いに関与していることであった。このような隠された歴史的事実を明るみにすることに対し、不快に思う島民もいれば、文化遺産として重要だと言及する島民もおり、民族誌映画を制作するうえで注意が必要である。

令和2年度の研究は、新型コロナウィルス感染症の影響により、予定通りに進めることが困難であったものの、最終年度であったために執筆活動に十分な時間をあてることができた。主な執筆内容は以下の2点である。

1点目の内容は、西アフリカ島嶼国カーボヴェルデの音楽、歌謡モルナがユネスコ無形文化遺産に登録されたことにより、これからどのようにモルナの今日的価値を見出し、評価していく

べきなのかについて分析した。具体的には、令和元年に実施した現地調査による聞き取り調査によって得られたデータを示し、主に伝統的に演奏されるモルナと「ポピュラー音楽」として演奏されるモルナの双方が重要であることを指摘した。

2点目は、リスボンにおけるCV人移民とカーボヴェルデ南部フォゴ島の島民の故郷観について考察したものである。とりわけ、映画監督ペドロ・コスタによる作品を分析しながら、CV社会の実態、歴史、そして現在の島民が創造しようとしている故郷観を明らかにした。ここで示した重要なキーワードは「ディアスポラ」、すなわち島民の流動的な移動についてである。島民が移動していくことがいかに彼らが生きていくうえで重要なことなのか、さらに移住した新たな社会（ここではポルトガル社会）ではどのように現地住民に受け入れられ、反対に差別されているのかを示唆した。

CV 国内だけでなく、国外（ポルトガル）にも焦点を置いたことにより、今後の研究の視野を広げることができ、歌謡モルナの国際的な広がりについて論じたことによって「伝統的」かつ「現代的な」モルナの新たな価値が世界に認められたことを明確に示した。

今後は、国際的な広がりをみせる歌謡モルナという音楽文化が、ポルトガルに移住した CV 人移民が彼らの「ホーム」や「居場所」、「故郷」を創造していくうえでいかなる役割を果たしているのかについて考察を深めたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 青木敬	４．巻 5
２．論文標題 サンヴィウセンテ島と日本人漁師の文化接触－カーボヴェルデの「サイコー」な人たちは誰だったのか－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国際言語文化	６．最初と最後の頁 65-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 青木敬	４．巻 52
２．論文標題 閉ざされた〈扉〉／開かれた〈道〉：映画監督ペドロ・コスタとカーボヴェルデ人の故郷	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ユリイカ	６．最初と最後の頁 166-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 青木敬
２．発表標題 カーボヴェルデ の「サイコー」な人たち：日本人漁師とサンヴィセンテ島民の文化交流によって生まれた伝統的なうた
３．学会等名 日本アフリカ学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 川瀬慈、村津蘭、ふくだぺろ、矢野原佑史、青木敬	４．発行年 2019年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 344
３．書名 あふりこ：フィクションの重奏／偏在するアフリカ	

１．著者名 ウスビサコ、清水貴夫、和崎春日、緒方しらべ、中村融子、クラベール・ヤメオゴ、吉本秀純、青木敬、遠藤聡子、阿毛香絵、菅野淑、小川さやか、鈴木裕之、川瀬慈	４．発行年 2020年
２．出版社 青幻舎	５．総ページ数 208
３．書名 現代アフリカ文化の今：15の視点から、その現在地を探る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

academia
https://kansai-u.academia.edu/KayAOKIKeiAOKI%E9%9D%92%E6%9C%A8%E6%95%AC
関西大学学術情報システム
http://gakujo.kansai-u.ac.jp/profile/ja/3ac537b4f93e7133.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関